Plant

作・山口大器

作品概要

他者と共に生きる上で、個人の内的な欲望は抑え込まれている。そしてその欲望は世間で拒否されてすらいるようだ。本作は、手のひらにマイクロチップを埋め込み、合理的な他者との合意形成を行う世界が舞台である。「人間に寄生する植物」が登場するが、その仕掛けは、人々の隠している欲望を明らかにして、そして滑稽に（当事者は悲劇であるが）舞台上に広げようとしている。他者を虐げる欲望を非難しながら、同時にその存在を認め、歪みを抱えながら生きていくことを肯定したい。「他者を支配したい」「欲求の捌け口にしたい」という欲望に飲み込まれる様と、逆に他者と支え合い共に生きていく方法を探す人々の物語である。

あらすじ

人々が右の手のひらにマイクロチップを入れ、それを重ね合わせることで様々な“合意”をとる時代。入室、契約、さらには性的合意など、様々なことに活用されている。

ある日、柊円が久しぶりに帰宅すると、同居しているパートナー（木田直）の姿がない。代わりに部屋には見覚えのない大きな木が鎮座していた。友人の江野木優人と、その後輩の緒ヶ玉君丸の助けを借りてパートナーの行方を探すことにするが、ある日彼の行方を知っている風の女性が現れ一枚の葉を見せながら「木田さんと”合意”関係にある」と主張する。その葉は自宅に鎮座していたその「木」のものだった。木田は植物に寄生され、その「木」が木田自身だったのである。そして、その植物は江野木にも寄生していた。江野木の頭から木の芽が生えているのである。

木田が辿った運命を探りながら、次第に成長をする江野木の植物に振り回されながら、少しずつ人々の底に眠る欲望が現れはじめる。

登場人物

柊円　２８歳。恋人が失踪した。
江野木優人　３０歳。円の友人。劇団代表。
緒ヶ玉君丸　２８歳。優人の地元の後輩。植物学者見習い。
羽村美月　２１歳。直の知り合い。
羽村桜　３１歳。美月の姉。
・・・
木田直　３５歳。システムエンジニア。登場しない。

背景・設定

物語の舞台は、現在とは少し違う日本の北部九州のある都市。
政府の政策により、個人タグ「マイチップ」を埋め込むことを推奨されている。そのチップは通常右の手のひらに埋め込まれていて、個人番号、戸籍、保険証や犯罪歴などの各種個人情報と紐づけられている。
さらにチップは血流・血圧・血中酸素濃度・血中アルコール度数などが検出でき、それによって急激な感情の変化を通知することができる。これにより、さまざまなハラスメントや犯罪を未然に防ぐことに成功している。
また、チップにはＮＦＣタグのようなものが内蔵されており、機器やマイチップ同士を近づけて、通信することができる。これによりチップ同士を触れ合わせることで様々な合意書類を作成でき、合意のない性交渉を防ぐなどに役立てようとしている。
当然、このチップについては賛否両論あり、社会問題となっているがポイントを配給することで装着率をあげることに成功しており、普及率は６割弱となっている。

そこには大きな植物が一本立っている。植物には大きな幹が二本。小さな無数の枝。
植物は開場中も、呼吸を続けている。

そこはどこかの部屋のようだ。男女が二人暮らしをしている。
部屋の隅にはAースピーカーが置いてある。そして、離れたところにポツンと携帯端末が置かれている。
時々、携帯端末に通知が入る。通知はかなり溜まっているようだ。

そして開演時間になると音楽が少しずつ大きくなり、

1

人が一人、スーツケースを引いて現れる。

人はふと立ち止まり、喋り始める。
その植物は、やはり呼吸を続けている。

人　……あの人は一体何を考えているんだろうか。私は一体どうしたらいいんだろうか。長い旅の終わりまで、きっとその中で激しく流れる液体は、繰り返される代謝は、そして、激しく波打つ鼓動は、外から眺める私には何も教えてくれない。
誰の迎えも来ない駅で大きな荷物を持って降り、私は一人、家に帰る。ここは終着点なのか。それとも私の旅がここから始まるのか。
誰も正解など教えてくれない。

そこは部屋。その人――柊円――の住む家である。
部屋ではAースピーカーから延々と同じ曲が流れている。
円は部屋に、まったく身に覚えのない木が立っていることに驚く。

円　……ただいま。

流れている音楽を止め、円はいるはずの同居人を探し部屋を巡る。
しかし、その人は見つからない。

円　帰ったよ。直。

円は不審そうに部屋を見渡し、その植物の落ち葉を一枚拾う。

そして、思いついて端末を取り出しメッセージを送信するが、
すると部屋に置きっぱなしにしてある別の端末から通知音が響く。
円はその端末を拾い、

円　あれ？

2

1場から数日後。
円の家には友人の男――江野木優人――と、その後輩――緒ヶ玉君丸――がやってきている。
優人は少し不思議な髪型をしている。

優人　で、失踪しちゃったわけよ。
君丸　はあ。
円　まだ分かんないけどね。
優人　そっか、まだ帰ってくるのを待ってる段階なんだけど。
円　……うん。
優人　まあでもそういうわけやから、ちょっと力を貸してほしくって。
円　あ、優人くん、（手を差し出して）合意。できる？
優人　ああ、ごめんごめん。

と、優人と円は端末を操作して、右手を重ね合わせる。
端末から軽快な音声が鳴り響き、「合意」が成立する。

優人　はい。合意成立。（端末を読んで）「柊円、江野木優人、両者の入室合意がとれました」。ね。
円　ありがと。ごめんね、神経質でから。
優人　全然。むしろ当然やろ。
円　（君丸に）よかったら、いいですか。

君丸　え？
優人　合意をるんよ。こうやって「マイチップ」を触れ合わせて、部屋に入りますよって。知らんの？
君丸　それは知ってますけど。
優人　後からパートナーが帰ってきたときに、浮気とか疑われたり、無理に押し入ったとか言われても困るやろ。これがあれば何も後ろめたいことはありませんって証明になるんよ。それくらい常識よ、アップデートしていかな。
君丸　すみません。
円　ああ、いやいや、一応ね。一応。
優人　（君丸に促して）ほら。
君丸　はい。

と、円と君丸も同様に端末を操作、右手を重ねて「合意」を取る。

円　ありがとう。
君丸　はい。
優人　でも便利よ。「マイチップ」。賛否両論あるのは分かるけど、俺は肯定派。このおかげで合意なく行われた色んなことがちゃんと事件になるし、紐付けされた情報で、かざせば保険証もいらんくなる。俺これで、確定申告もしたよ。
円　へえ。
優人　いや、なんとしても直さん見つけな、損失よ。テクノロジーの。
円　別に彼が開発したわけじゃないから。少し携わってたってだけで。
優人　でも政府関係の仕事なわけやろ？すごい人やん。
君丸　あの。
優人　ああ、その失踪した木田直さん、円ちゃんの旦那さんが、この「マイチップ」事業に携わってたって。ね？
円　まだ彼氏。結婚しよって言われただけやから。まだ決めたわけやないし。
優人　あ、そっか。ごめんごめん。
円　（君丸に）彼エンジニアでから。
君丸　はあ。
優人　でも頑張って探すけ。ちょっと待っとってね。

君丸　あの、それで、なんで僕が。
円　話してないん。
優人　なんとなくしか。
君丸　聞いてません。
優人　さっきも言ったように、この人、柊円さんが一週間前、帰省から帰ってくると、同居人でパートナーの木田直さんの姿が見当たらず。携帯も置きっぱなしで、手がかりもほとんどない。そこで、探偵事務所でアルバイトする俺に連絡が入ったわけ。
円　警察に通報するか迷ったんやけど、もし違ったら迷惑かかるかもやし。優人くんには劇団おった頃から色々相談しよったし、探偵ならって。
優人　違う違う。バイトよ。本業は演劇やから。演技の参考になるかなってしとるだけやし。事務作業ばっかやし。
円　ああ、ごめん。
優人　全然、全然頼ってくれて嬉しいんやけどね。（君丸に）それでね、唯一残された手がかりってのが、この木で。
君丸　木。
円　もともと、うち観葉植物とか置かんし、鹿児島帰る前にはなかったのに、帰ってきたらあって。彼が自分で買ってきたんやと思うんやけど……。

優人は円が話している最中に植物をいじって、木の実を一つ誤ってちぎってしまう。そしてバレないように、自分のポケットにしまい、何もなかったように話に混ざる。

優人　あ、鹿児島ってのは、円ちゃんの実家ね。
円　ああ、そう。
優人　で、行方の検討もつかず、手がかりもこの木しかなくて、お前を呼び出したんよ。
円　……もしかしたら彼が残したメッセージ的なものなんかな、みたいな。
君丸　（植物を指して）いいですか？
円　ああ、もちろん。どうぞ。

そして、君丸はその植物を観察し始める。

それを眺める優人。

円　（君丸に聞こえないようこっそりと）大丈夫かな。
優人　え？
円　あの人、緒ヶ玉さん？急に呼び出されて迷惑しとるんやないん。
優人　ああ、君丸は大丈夫大丈夫。
円　本当？地元の後輩でしょ？優人くんの。
優人　うん。あいつ昔からああで。無口やし、何考えとるか分からんけど、植物のことならなんでもあいつに聞けば間違いないんやから。農学部で、今も研究しよる。植物オタクなんよ。
円　ああ……。
優人　やけ、この木については一旦、君丸に任せよ。
円　うん。
優人　そういえば直さん、チップは？入れとるやろ。位置情報とか分からんのかな。それくらい（できるやろ）――
円　あ、そこまでは開示されないらしい。キジャクセイがどうのって。
優人　ん？
円　何？
優人　あ。ゼイジャク。
円　ん？
優人　漢字。にくづきに危ないで、脆弱（ゼイジャク）。
円　あ、脆弱。
優人　恥かくよー。
円　危ない危ない。
優人　そういえばさ、話変わるんやけど。
円　ん？
優人　この前話した件、どうやろ。劇団復帰の話。
円　え？ああ……。
優人　全然、答えは急がんけど。直さん見つかるまで落ち着かんやろうし。
円　そうね。ちょっと待って。
優人　全然全然。

と、君丸は植物の調査が終わったようで、

君丸　あの。
優人　お。この木の謎を解いてくれるってよ、博士が。
円　どうだった？
君丸　それが……。
優人　なんだよ、もったいつけるなって。
君丸　すみません。分かりません。こんな植物、見たこともない。

3

場面が変わり、そこは優人が代表を務める演劇団体の稽古場。

優人　はい、それでは、本日も稽古よろしくお願いします。
俳優たち　お願いします！
優人　もうすぐ本番なんでね。気合いいれていきましょ。お客さんも沢山ね、入ってくれてるみたいですし。はい、それでは昨日の続きのシーンからいきたいと思います。はい、準備できたら、いきましょう。

俳優たちはシーンの準備をする。

優人　おっけー？はい、さん、にー、いち、アイ！

シーンが始まる。
少しして、優人は稽古を止める。

優人　あーん、このシーンさ、もっと気持ちって言うのかな、恋人が部屋を出ていってしまって、追いかけるべきか追いかけないべきか、それが問題だ、というか。それをすごい悩んでるってシーンなのね。だから、苦悩みたいな、気持ちがね。もうちょっと見たいわけよ、お客さん的には。
俳優　はい。
優人　どう、動いてる？気持ち。
俳優　（自信げに）はい。
優人　え？
俳優　（やはり自信げに）動いてます、気持ち。

優人　ああ、そっかそっか。でも、あんまりそれが見えないって言うか。もちろん気持ちなしでオーバーにして欲しいって意味じゃなくて、心が、掻き乱されて溢れてくる、みたいな。
俳優　はあ……。
優人　え、言ってること分からない？
俳優　いや……。
優人　え、どっち？分からない？
俳優　あ、いや、わかります。
優人　よかった、よかった。
俳優　はい……（考えている）。
優人　じゃあ、それをもっと増幅してこっちにぶつけるって言うか。
俳優　……はい……（と端末を触りだす）はい。
優人　え、あ。大丈夫？
俳優　動いてます。
優人　え？何が？
俳優　（端末を見せて）動いてます、心。
優人　何それ（端末を受け取って見る）。
俳優　「チップ」が体の？血圧とかから？なんか急激な感情の変化が起きたときに教えてくれるんですけど。動いてるって。心が。
優人　え、言ってるの？チップが？マイチップ？
俳優　はい。なんか、らしいっすよ。血圧とか？心拍数とか？そういうの読み取って、なんとなく心理状態の変化を？教えてくれるっていう。
優人　え、これ、そんなこともできるの。
俳優　はい。（優人の端末を操作しようとして）
優人　ちょっと、ちょっと、何するの。
俳優　あ、設定を。
優人　自分でするよ。（チップにかざして）はい、ロック解除。
俳優　はい。（操作して）これ許可すればできますよ。知らなかったですか？
優人　いや……。（自分の端末を見つめる）
俳優　あの、だから、心は？動いてるんですけど……。
優人　（何かが込み上げてくるが、押さえつけて）そっかそっか。え、ってかなんでそんなに煽る感じなの？
俳優　え、煽ってますか？
優人　いや、そうじゃないならいいんだけど。まあいいや。えーっと。じゃ

あ、ちょっと方向性変えてみようか。えっと、君恋人いる？

俳優　恋人っすか？

優人　ああ、いや、あんまりパーソナルなことだから、答えたくなかったら答えなくていいんだけど。仮にいるとして、どうだろう、そういう相手が家を出ていったときに……。あ、まあ人じゃなくてもいいや。なんか大事なもの、あ、飼ってるうさぎ。うさぎがいたとしよう。あ、いや別に女性だから、弱々しいからうさぎだって喩えてるわけじゃないんだけど。じゃあ、えっと、蛇、蛇でもないな、じゃあ、アルマジロ。君はアルマジロを飼っていて、

俳優　え、アルマジロ？動物を飼ってるって設定でしたっけ。え？（困惑する）

優人　ああ、ごめん。そうじゃなくて……。えーっと、だから大事なものがさ。いるのか、いないのか、人それぞれなんだろうけど、いてさ、いなくなったらどう思う？

俳優　はい、え？どう？

優人　だから、どう思う？

俳優　えっと……（考え込んでしまう）

優人　（いよいよ我慢の限界で）なんだよ、ちゃんと伝わってるの？？俺分かんないんだけど。

稽古場は凍りつく。

端末は、優人の心が激しく動いたことを通知する。

優人　（端末を読んで）「イライラしてるようです」……。動いてるわ。心。ちょっと深呼吸しよう。

みんなで深呼吸をする。

優人　ごめん、えっと。ごめんね。ついカッとなっちゃって。嫌な気持ちになってない？

俳優　まあ、大丈夫ですけど。

優人　……本当に？怖くて言えないけど、本当は、みたいな。

俳優　あ、いや……。

優人　気にしなくていいよ。正直に教えてくれた方が。ほら、後から告発さ

れて炎上とかした方が、嫌だから。どうかな。
俳優　いや、本当に。
優人　あ、じゃあこうしよう。みんな目瞑って。（目を瞑る）もし、今、辛い気持ちを……（何かに気づいて）あ、だめだ、全員目瞑ってるわ。えーっと。
俳優　本当に。本当に、大丈夫です。
優人　本当？じゃあ、（端末を操作して手を差し出す）合意を。
俳優　はい……。（優人と手を合わせる）
優人　（自信無げに）ごめんね……。

端末から、合意を交わしたことを知らせる音が鳴る。

4

しばらくしたある日。再び円の部屋。
君丸が再び訪ねてきている。
君丸は写真を撮ったりするなど、植物の観察をしている。

円　ごめんね、忙しいのに、何度も来てもらって。
君丸　……。いえ。
円　どう？あ、なんか飲む？本当に何もいらない？
君丸　……。大丈夫です。
円　そっか。……そういえば、優人くんの公演見に行く？劇団の。明日からじゃなかったっけ。
君丸　……いえ。
円　そっか。優人くんとは長い付き合いなんだっけ？仲良いんだね。
君丸　……。（答えない）
円　あれ？そうでもないっけ。確か地元の頃からの付き合いみたいな。……違ったっけ。でもまあ、そういう縁が続いているって、羨ましいっていうか。……まあ続けばいいってもんじゃないんだろうけど――……。
君丸　あの。何をそんなに気にしてるんですか。
円　え。あ、そう？ごめん。色々聞き過ぎだね。
君丸　……そんなに興味ないでしょ。

円　いやいや、そんなことないよ。
君丸　いいですけど。別に。
円　……そっか。……この木のこと、なんか分かった？
君丸　はい。色々と分かってきました。いただいたサンプルを研究室で調査させてもらって。
円　おお。そっか。それで。
君丸　これ……何もわかりませんでした。誰も知らないそうです。海外の研究者にも聞いてみましたが、似た植物はあるけど、ちょっと違うって。それって……、新種ってこと？
円　おそらく。
君丸　ほお……。
円　新種を作ること自体は全然難しいことじゃないんですけど。
君丸　ああ、そっか。品種改良みたいな。
円　はい。でも、これはそういう類の新しさじゃなくて。
君丸　どういう……？
円　組成組織が不思議なんです。この木には、人間の体液に近い成分がそれなりの量含まれていました。つまり、血液とか尿みたいな。
君丸　……体液。
円　はい。
君丸　それは……。どういうこと？
円　まだ分かりません。なので、追加でサンプルを頂ければと思っていますが、よろしいですか。必要であれば、また合意書類を作成しますが。
君丸　ああ、大丈夫。
円　そうですか。
君丸　丁寧にどうも。
円　植物に合意は取れませんから。
君丸　……？
円　失礼します。

と、君丸は枝などの採集を始める。

円　何しとるんやろ。
君丸　……はい？
円　あ、いや。彼。人には「なるべく早く返信してね」とか。言ってたく

せに。意味わからん。
君丸　（返事をするか迷って）そういえば、どれくらい留守にしていたんですか。
円　1ヶ月。
君丸　1ヶ月？
円　うん。まあ、敢えて話すようなこともないし、全く連絡してなくて。でも帰る一週間前くらいに連絡したら、既読にならんくてから。
君丸　はあ。
円　わけわからん。……結婚しようって言われたんよ……。
君丸　……ああ。
円　でもその後私ちょっと実家にもどってて。それでもしかしたら……極端なこと考えたり……。（空気を察して）ごめん、ちょっと悪い方に考えすぎやん。落ち込んどるけんかね。
君丸　……心中お察しします。
円　それ、本当に察してる？
君丸　……いえ、あんまり。
円　（笑って）そうやろ。まあ、私は私で頑張るわ。「神様は乗り越えられる試練しか与えない」って言うし。ね。
君丸　……。サンプルはいただきましたので、今日はこれで失礼します。
円　あ。はい。
君丸　また来てもいいですか。
円　え。
君丸　その後の木のデータ取りたくて。
円　ああ、はいはい。もちろん。
君丸　では。（帰ろうとする）
円　はい。お願いします。
君丸　……さっきの違うと思います。
円　え？
君丸　試練の話。乗り越えられなかったものは生き残らないんで。そうやって絶滅した植物はたくさんあります。……では。

君丸は去り、円は部屋に残される。

5

場面が変わり、また別の日。そこは道端。
円が道を歩いていると、一人の女――羽村美月――が現れる。

美月　あの！
円　はい？
美月　……（一枚の葉っぱを差し出して）これ。
円　はい。
美月　あなたのですか。
円　……違いますよ。
美月　え。
円　なんですか。これ。
美月　……葉っぱです。
円　はい。え？
美月　え？
円　え？
美月　ええ？？
円　落としました？私が。
美月　いいえ。
円　ですよね。多分、私のじゃ、ないです。
美月　はい。私のです。（ガッツポーズ）しゃー。
円　なんですか。
美月　いや……。なんでもないです。すみません。
円　では。（去ろうとする）
美月　あの、
円　何ですか。
美月　まだ帰ってこないでしょ。
円　え？
美月　直さん。木田、直さん。
円　え。
美月　探さないんですか。
円　知ってるんですか。何か。
美月　いや、私はそんなには。確認したかっただけなんで。はい。失礼しま

す。
円　ちょっと待って。知ってるんですか、木田のこと。
美月　（復唱して）木田のこと……。いや。知らないです。
円　え、じゃあ何で。
美月　あ、ごめんなさい、嘘です。知ってます。すみません。
円　どこにいるんですか。
美月　え？
円　どこに居るか知ってるんですか。探してますから。
美月　……知らないです。
円　そうですか。
美月　はい。
円　あの、どういう……（関係ですか）？
美月　どういう……？
円　同僚の方？
美月　いや、知り合いです。知り合い？知り合いです。
円　ああ……。どういう？
美月　どういう??ちょっと難しい、かな。
円　はあ……。
美月　（再び葉っぱを示して）これ、本当に知りませんか？
円　知らない、と思いますけど……。
美月　あ、本当に知らないんだ。（ガッツポーズ）しゃー。
円　なんですか。
美月　知らないならいいんです。私は知ってるんで。失礼します。
円　（心当たりがあった）え。木。あの木。うちにある木。どうしてそれ。
美月　やっぱりなんか関係あるんですね。あなたがうちにおいたんですか。
円　木があるんですね、お家に。
美月　え？
円　悩んでましたから。直さん。
美月　え。
円　……生えてくるって。
美月　何が。
円　やっぱり直さん、飲み込まれちゃったんですよ。かわいそうだけど。
美月　何言ってんの。
円　私、合意があります。

円　え？
美月　直さんと、合意しました。合意のある、「関係」です。

美月は嬉しそうに、そして大事そうに、端末を示す。

円　合意って……。まさか、嘘だよね。
美月　嘘じゃありません。
円　全部嘘でしょ。ありえないことばっかり言わないで。
美月　悩んでましたから、直さん。生えてくるって。本当ですよ。
円　ちょっと待って。
美月　今、お家にいますか？いますよね、直さん。
円　怖いんだけど。
美月　欲しいです。
円　え。
美月　木。ください。
円　ちょっと、
美月　あ、でも、急いでとかじゃないんで。整理つかないですよね。「感情」が。失礼します。

と、美月は去る。

6

数日後。円の部屋。そこに円と、不思議な帽子を被った優人がいる。

優人　えー。何。怖いね、その子。
円　でしょ。「直さん、飲み込まれたんです」とか言い出して。
優人　なんもされんかった？
円　うん。大丈夫。でも、どう思う。合意関係って。
優人　うーん……。
円　正直に、言ってもらって大丈夫。
優人　まあ、うちでやってる浮気調査とかの場合、発覚する一番の理由ってのが、携帯でパートナーの「合意履歴」見ちゃったっていうパターン。性的合意の履歴があったっていう。チップが普及し始めてからね。割

とダイレクトに証拠になっちゃうんよ。
円　うん。
優人　自分で、自分の墓穴掘って、バカらしいんやけど。でも、結構あるんよ、不貞相手との合意が取れてればいいんじゃないかって勘違いしとるんか知らんけどさ。
円　じゃあ、やっぱり。
優人　……その女の人が言うことが本当なら、そういうことになっちゃうんやないかな……。客観的に。
円　……。
優人　ま、どっちにしても本人探さなきゃいけんのは変わらんし。携帯も見れてないんやろ。
円　パスコード分からんし。
優人　チップがあればロック解除できるんやけどね。
円　右手だけあっても怖いやろ。
優人　確かに。
円　それに携帯盗み見るのとか、ちょっと。
優人　緊急事態なんやから。
円　うーん……。その後、そっちで手がかりは？
優人　それが全く。稽古とバイトの合間に、この前聞いたとこにも張り込んでみたけど。
円　ごめんね、そこまでしてもらって。本番もあったのに。
優人　全然全然。大丈夫よ。この前本番終わったけ、今余裕あって。気にせんで。
円　優人くん優しすぎてびっくりするんやけど。
優人　え。そう？優人、なってる？
円　え？
優人　優しい、人。
円　ああ、うん。なんかすごい変わったよね。
優人　まあ、俺も色々気づいたんよ。稽古場でももう問題なるし、色々ハラスメントとか。
円　前はひどかったからね。私がいた頃。
優人　すみません。横暴だったよね。
円　まあ。何かあったん、心境の変化が。
優人　変化、変化ね……。もう３０だしね……。（と帽子をさりげなく触る）

円　あのさ、気になってたんだけど、それ（帽子）。
優人　え。あー……。実はさ。
円　うん。
優人　俺、隠し事してて。本当に誰にも言えなかったんだけど。ずっと。……ちょっと話してもいい？
円　うん。え、何。
優人　もう、３０つっても、まだ３０でさ。いや、正直、正直まだまだ彼女つくって、遊んで、色々したいわけさ。あ、ごめん、この手の話題大丈夫？（右手を差し出して）
円　はい。

合意音。

優人　ありがと。それでさ、まあこういう仕事してるし、あ、探偵じゃなくて、演劇の方ね。見てくれもまあ、大事じゃん。昔はさ、イケメンって言ってチヤホヤもされたわけよ。正直もう一回はモテたいと思ってる。モテ期来いって思ってる。あ。それで。それでよ。もう今日カミングアウトするんだけど。（端末を操作して）これ。実は。おれずっとカツラだったの。

と、画面に映された優人の写真では頭髪が薄い。

円　ああ……。
優人　ひどくない？これ。おれ、ちょっと受け入れられんくて。２０代後半くらいからかな、どんどん薄くなっていって。不摂生な生活とか、食生活とか、関係ないんだろうけど性欲を抑えてみたり、色々試したっちゃけど、もう止まらんわけ。でもずっと受け入れられんくて、ずっと隠してきた。自分に嘘をついてきた。
円　そうだったんだ。
優人　そうだった……。苦しかった……。

と、優人の端末から通知が鳴る。

円　大丈夫？

優人　いやいや、心が動いたんよ。これ（右手のチップ）が色々検出してから。劇団員に設定してもらって。
円　そうなんや。
優人　うん、設定してもらったけど、止め方わからんくなった。
円　ああ。でもまあ正直そうなんじゃないかなと思ってた。
優人　え。
円　頭。
優人　そうなの？
円　うん。似合ってなかったし、髪型。いつ会っても同じだし。
優人　えー？？まじ？ちょっ……まじ？？
円　まじ。
優人　まじかー。でもまあ、この話はここで終わらんくて。むしろここからが本題で。その先なんだわさ。なんでこんなカミングアウトができるようになったかって言うとね。じゃーん。

と、優人は頭の被り物を外す。
すると頭皮には、幾らかの緑色の「毛」が生えている。

優人　生えてきましたー！！
円　えっ？？
優人　髪の毛！
円　緑やし。
優人　もうなんかさー、これまで無かったものが、いや黒くなくてもいい、ここに生えてるってだけで、なんか自信がついてくるっていうかさー。俺もまだまだ捨てたもんじゃねーなって。俺なんか自信ついてきちゃって、マッチングアプリ始めちゃった。いきなりマッチして、早速明日出会うことになった。やっぱ恋愛と髪は相関関係があるよ。
円　なんで。
優人　分かんない！でも俺は今、多幸感に包まれている……。
円　これさ……。（と、頭を触り出す）
優人　なになに。

円はプチンと一本、優人の「毛」を抜く。

優人　痛っ。
円　あ、ごめん。見て。葉っぱ。
優人　えっ……。
円　生えてくる……。
優人　何？
円　言ってたんよ、あの女が。合意女。
優人　生えてくる？
円　直が言ってたって。生えてくる、飲み込まれるって。
優人　それって……。

二人はそこに聳え立つ「植物」を見つめる。
二人はとある考えにたどり着くが、

優人・円　いやいやいや……。

しかし、不安になって、円は「植物」に触れる。
その一本の太い幹がまるで、右の手のように思えて、
円は自分のとは別の端末を持ってくる。

優人　それは？
円　直のケータイ。
優人　何を……。

円は、「植物」の右手に端末を近づけて、
そこに埋まっているチップによって、ロックが解除される。

円　解除された。
優人　ってことは。
円　（植物に）直？

二人はまた植物を見上げる。
植物は呼吸をしている。

7

場面が変わって、次の日の夜。
そこはどこかの焼肉店。優人と君丸が食事をしている。
優人の頭の植物は少し成長している。
優人はことあることにコップの水をゴクゴク飲んでいる。

優人　もう散々よ。
君丸　はい。
優人　髪が生えてきたと思ったら、新種の草やし。マッチングして会った女はヤバいやつやし。最悪よ色々。
君丸　ああ。
優人　今日会ってきたんよ。……最初はいい感じかなと思ったらさ、なんかセミナーとか言い出して。オンラインセミナーがどうのって勧誘始めてきて。
君丸　はい。
優人　（遠くの客を見て）ほら、見てん、あのカップル。あのぐずぐずになって寄り添っとる二人。あれ多分不倫よ。バイトでも探偵やってると分かるようになっちゃう。
君丸　はあ。
優人　なんかバカらしくならん？俺は頑張って色々アップデートしたりしてさ、自分を押さえ込んで生きとるのに、一方で自分の欲望垂れ流しで、アップデートもできずに生きてるやつらが腐るほどおる。なんなんこれは。
君丸　そうなんすね。
優人　俺は頑張ってるよ。昔とは変わったやろ？そう思わん？
君丸　……まあ。

君丸が一つ肉を取って自分のタレにつける。

優人　おい、その肉俺が育てとったんよ。
君丸　え。
優人　もう。
君丸　すみません。（とその肉を優人のタレ皿に移す）

優人　載せんな。
君丸　へ。すみません。
優人　いいよ、もう食っちゃえよ。（とその肉を返す）
君丸　でも、これ。（育ててたんですよね）
優人　いいよ、もういらんわ。分からんかね。
君丸　すみません。肉は肉なんで。
優人　ここに入っちゃったら、もうその人の口の中に入っちゃったみたいなもんでしょーが。（箸をタレに）つけとるんやから、こう。
君丸　ですかね。
優人　そりゃそうよ。……。お前はさ、あんさ。ちょっと箸を置けよ。
君丸　焦げちゃう……。
優人　いいけ、ほら（と網の肉を端に寄せて）仮にも先輩やろ。
君丸　はい。
優人　いや、別に偉ぶりたいわけじゃないんよ。けどさ先輩と焼肉に来たらさ、「あ、この肉先輩が育てとるんやな」みたいな配慮はあるべきじゃん。あっても良くない？
君丸　すみません。
優人　謝ってほしいわけやないけど。ってか、すみませんって、言えばいいと思っとるやろ。
君丸　すみません。
優人　思っとるんかい。
君丸　すみません。
優人　「肉とりましょうか」の一言とかさ、そういう思いやり？みたいなの、普通するけどね。俺やったら。
君丸　肉、とりましょうか。
優人　（遮って）いい、いい。
君丸　すみません。
優人　やけ、やって欲しいとかってそういうわけやない。でも、他の人はそうじゃありませんよって。お前が大学の教授とかと飲むときに恥かかんように、言っとるんよ。
君丸　すみません。
優人　まあ、いいや、ごめん、こんな話で。ほら、食えよ。

君丸は再び肉を食べ始める。

優人　何でよりにもよって今日お前と焼肉なんやか。
君丸　それは先輩が。
優人　そうだよ、俺だよ、誘ったのは。誰でもよかったんよ。

と優人が項垂れると、頭の植物が網にかかったようで、

君丸　（植物を心配して）焦げてます焦げてます。
優人　ああ、くそぉ。（肉を食べる）ほら、玉ねぎも焼けとるよ。
君丸　あ、僕食べないんで。
優人　え。
君丸　野菜。食べないんで。
優人　嫌いやっけ。
君丸　いや。食べないようにしてるんで。
優人　……。あそう。好き嫌いすんなよ。
君丸　……すみません。
優人　で。これは。なんかわかった。
君丸　その話なんですけど。
優人　おお。
君丸　やっぱり、新種だそうです。柊さんの家の植物も、先輩のそれも。本当はそうやって外で晒して歩くのもやめたほうがいいと思うんですけど。保護の観点から。
優人　外では帽子被ってるよ。
君丸　日光も必要なんで、適度に陽に当ててあげてください。
優人　いいよ、それは。それで？
君丸　多分、……寄生植物、なんだと思います。人間に寄生する。
優人　寄生？
君丸　はい。たとえば、世界で一番大きい花のラフレシアも、他の植物、ミツバカズラに寄生して生きているんです。自分では葉緑素を持たずに、他の植物の根に寄生して養分をもらって。植物同士はよくあるんです。ヤドリギに、ナンバンギセル。でも、動物は初めて聞きました。
優人　え、おれ研究室をタライ回されたりする？なんか国の機関とかに。
君丸　さあ。でもありえますよ。本当は僕も先輩に研究に協力して欲しいんですけど。
優人　まさか……人体実験？

君丸　（答えず）とりあえず、今日採血だけさせてほしいんですけど（と、採血キットを取り出す）

優人　いやだよー。俺注射とか超嫌いなんだよー。病院も大っ嫌いなんだよー。

君丸　（しまいながら）そうですか……。寄生された側の、体液も調べたかったんですが……。

優人　ああ、言ってたね。血とかオシッコが検出されたって。あの木から。

君丸　はい。それに似た成分が。人間に寄生して、それを養分に生きているんだと思います。

優人　俺、死んじゃうの。養分を吸い取られて。

君丸　植物の場合は、寄生して宿主と共生する種がほとんどなんですけど、動物の場合は例がないのでなんとも。カマキリのハリガネムシみたいなパターンもあり得るかなと思ってます。

優人　ハリガネムシってあれか。カマキリの腹に寄生して大きくなったらカマキリ自信の足で水場に飛び込ませて自殺させるっていう……。

君丸　はい、水に入ったらお腹を突き破って出てくる、あれです。

優人　ああ……（お腹を抑える）。

君丸　まあそれは虫ですが。柊さんのパートナーの方のことを考えると、そのまま放置しておくと……。可能性はありますね。

優人　除草剤買お……。え、これって、感染とかその可能性ない？円ちゃん大丈夫かな。

君丸　どうですかね。先輩が発芽した理由について、心当たりないですか。

優人　それが……。最初、お前と一緒に家に行った日に、持って帰っちゃって。木の実。

優人はポケットから木の実の殻を取り出す。

君丸　殻ですね。ここから発芽しちゃったんですね。

優人　持って帰っちゃった……。

君丸　先輩の話きいて、まさかと思ったので柊さんのお宅の木については、先ほど木の実を全て回収してきました。あとビニルも被せてきたので、多分大丈夫だと思いますけど。木が死なない程度に。

優人　そうなの？

君丸　はい。

優人　一人で？
君丸　はい。ダメですか。
優人　いや、普通に考えて、男女二人きりってのは。
君丸　すみません。……でも大丈夫です。
優人　大丈夫って。男が言っても、信用できんやろ。
君丸　僕、女の人に興味ないんで。
優人　え。
君丸　はい。
優人　そうなん？
君丸　はい。だから大丈夫だと思います。
優人　あ、そうなんだ。

間。少し気まずくなったのか、優人はコップの水を飲み干して、

優人　お水くださーい。

8

場面が変わり、また数日後。そこは喫茶店。
そこには並んで美月と、美月の姉――羽村桜――がいる。
そこに円がやってくる。しばらく店の中を探して、

円　（美月を見つけて）……あ。
美月　（手を挙げて）こっちです。
円　……はい。（席に座る）
桜　今日はありがとうございます。すみません、呼び出して。
円　いえ。
桜　いいですよね、このお店。
円　はい？
桜　私よく利用させてもらってて。都会の中にあるとは思えない緑豊かな雰囲気がとっても落ち着くでしょう。それにね、ここで出すものは全部、信頼できる店主の方が現地に直接行って、品質を確かめて、そのまま卸している百パーセント自然由来の、安心・安全なお飲み物とお食事でして。体に溜まった悪質なものが全部、デトックスされる気

がしません？
円　こちらは？
美月　私の姉です。
円　お姉さん。
桜　はい、美月の姉、羽村桜です。この度は妹がご迷惑をおかけしたようで。
円　いえ……。まあ、はい。詳しいことはこれから伺いますが。なんでお姉さんが。
桜　私が申し出たんです。ほら、妹だけだと、この子嘘つきなところもありますし、すぐ感情的になるし、きちんとお話し合いができないんじゃないかと思いまして。
円　はあ。
桜　安心してください。妹の肩を持つようなことはしませんから。中立な立場でいるように努めます。
円　そうですか……。
桜　あの、あなた、お名前は？
円　柊です。
桜　下は？
円　まどか、です。
桜　ひらがなですか？
円　いや、円形の円、でまどかです。
桜　いいお名前ですね。
円　どうも……。というか、別に話し合いに来たつもりはなくて。直について知ってることを教えてほしいんです。この葉っぱのこととか。

円はテーブルに持参した植物の葉っぱを出す。

美月　ああ、これですね。千切っちゃったんですか。

と、美月も葉っぱを取り出す。

円　千切ったっていうか。まあ、そうね。千切ってきた。
美月　可哀想。
円　……。まず、なんであんたがそれを持ってるか教えてほしいんだけど。

桜　あ、円さん。名前で呼んでもらえますか。美月、と。
円　は？
桜　この子にも名前があるんですから。その方が一人の人と人として向き合える。
円　……。美月さん。なんでか教えてもらえますか。
桜　答えなさい。
美月　もらったんです。
円　誰に。
美月　直さんに。
円　……。直とは、どういう関係なんですか。
美月　円さんは知らなかったんですよね。
円　何を。
美月　これですよ。あんなに悩んでいたのに。
円　……。これは……。あの木は、直なんですか。
美月　そうですよ。そうに決まってるじゃないですか。
円　決まってるって、普通考えられなくないですか。
美月　円さんにはそうでしょうね。でも私は見てきたんで。
円　見てきたって何を。
美月　木になるところをですよ。あ、言ってみれば木になるところを見れるような関係ですかね。
円　何その言い方。

と、円と美月の話が加熱するが、それを邪魔するように桜のコーヒーを混ぜるスプーンの「チン、チン」という音が間抜けに響く。

桜　あ、すみません。
円　いえ……。
美月　私の方が詳しいんですね。直さんのこと。
円　何それ。
美月　え、だって、知らなかったんでしょ？私は、直さんが木になったこと、事実として受け止めて、悲しんでいます。
円　……。いつから知り合いなの。直と。さぞかし長いんでしょうね。
美月　……1ヶ月くらいかな。
円　たった1ヶ月？あんたそれだけで――。

再び、桜がコーヒーを混ぜる「チン、チン、チン」という音が間抜けに響いている。

桜　（笑って）どうしたんですか？

円　……いや、別に。（美月に）1ヶ月って言うと、ちょうど私がこっちに居なかったくらいだね。

美月　そうなんですね。でもね、彼は私にいろんなことを教えてくれたんです。

円　ああ、そう。

美月　あの、その木、私欲しいです。

円　え。

美月　木。ください。

円　なんで。

美月　欲しいんです。

円　何であなたにあげなきゃいけないわけ。

美月　ダメですか。だってあの木が直さんだと思ってないわけですよね。

円　ダメだね。確かにまだ受け入れてはいないし、あんな大きな木正直邪魔だし、何なら浮気男のことなんか、最早どうでもいいけど、あんたには渡したくない。

美月　でもいらないんでしょ。だったらいいじゃないですか。訳わかんない。

桜　美月。

美月　すみません。

桜　すみません、円さん。感情的にならないようにいっつも言ってるんですけど。

円　いえ。

桜　でもね、円さん。この子の言うことも一理あるかなと思っていて。

円　え。

桜　あなたはあの木が邪魔。この子はこの木が欲しい。これで利害関係は一致しているんじゃないですか。確かに今は、あなたはこの子が憎いのかもしれない。けれど気持ちは一旦他所に置いておいて、二人ともウィンウィンになれないかしら。

円　何言ってるんですか。

桜　だって言いましたよね、正直邪魔だって。

円　言ったけど。

桜　だったらいいじゃないですか。

円　いや。え、そんなに簡単に割り切れなくないですか。
桜　だから、気持ちは一旦他所に置いておくんです。ほら、あそこに植えてあるパキラの根本とかに。
円　何言ってるんですか。
桜　人は気持ちに支配されすぎだと思いませんか。誰かを憎んで、誰かよりも上の立場に立ちたくて。それよりももっと大いなる善のために行動した方が幸せなんじゃないかな。それで世界はもうちょこっとだけ幸せになると思ってるんです。私は。
円　……。
桜　今では手にマイクロチップを埋め込んで、合意を取るって言うんですか、その人の気持ち同士でわかり合おうとしているらしいけれど、それも本来、おかしなことだと思うんです。どうすれば世界がもっと良くなるか、考えて行動すれば自ずと歩み寄れるはずだと私は思います。ほら、見てください、あそこに生えているガジュマルを。ただそこに立っていて余計なことは言わない。
円　彼は、妹さんがご執心している木田直は、そのマイクロチップの開発に関わっていたんですけど。
桜　悪魔の手先じゃないですか。
円　そんな言い方……。
桜　正直、人間のその方と妹が仲良くするのは、よくは思っていません。ですが、木となると話は別で私としてはどっちでもいいと思っています。
円　彼は人間です。
桜　人間のその人は、おそらく、少し傲慢なんじゃないかしら。その方に支配されてきた。私わかるんです。その人のお顔を見ると、辛いものを抱えているって。だから妹の変化にも気づきました。悪魔に取り憑かれたように。あなたも辛い思いをしてきたんじゃないかな。これはあくまで想像ですけど。
円　……そんなことはありません。
桜　うふふ。そうですか。でも今日いきなり、気持ちを整理しろって言うのも乱暴ですから、また日を改めましょう。いきましょう、美月。
美月　でも……。
桜　美月。
美月　はい。

桜　それでは、お元気で。

桜と美月は去る。
残される円。

9

場面が変わって、その日の夜。円の部屋。一人で円がいる。
優人と電話をしている。

優人　（以下、声だけ）悪魔？それはあんまりやね。
円　まじ地獄だった。
優人　お疲れ様でした。
円　「私分かるんです、その人のお顔を見ると」って。やばくない？
優人　分かられちゃったんだなー。
円　分かられてたまるかって。私が、直とどんな生活を送ってきたか。
優人　……そうやね。
円　優人くんは？その後大丈夫？
優人　んー？まあ、一応。
円　まだ生えてるの？
優人　バリカンで全部刈っちゃって、除草剤を塗ってる。
円　よかった。受け入れなきゃね、現実。
優人　もうちょっとモテたかった。
円　髪がなくてもいいって人もいるよ。多分。
優人　若い子にモテたいんよ。
円　あー。
優人　あー、頭ヒリヒリする。
円　除草剤の効果だね。
優人　この前まで育毛剤やったのに。

と電話口でガランガランと何かが転がる音がする。

円　大丈夫？
優人　ああ、うんうん。大丈夫大丈夫。

円　何してるの。
優人　今、今度の公演の脚本書いとって。ってか書く環境を整えとって。
円　あ、また本を書く前に部屋の掃除しとるんやろ。
優人　部屋が片付いとるんと片付いとらんのやと、集中力が圧倒的に違うけん。せんやった？円ちゃんも。試験前とか。まあ、今は部屋の片付けやないけど。
円　ああ、そうなん。
優人　うん。あ、それより、この前言ってた件、考えてくれた？
円　あ、俳優復帰の話？どうかな。
優人　いやー、円ちゃんおってくれると助かるんよね。色々と。
円　ブランクあるしなー。
優人　でもほら、彼が演劇するの嫌がるけん辞めたみたいなところあるやん。今やったらできるんやない。彼は木になってしまったわけやし。
円　……うん。

と、円は植物を見上げている。

優人　円ちゃん？
円　たった一月でこんな姿に。
優人　君丸に聞いたけど、普通じゃありえない速度で成長してるんやって。人間から養分をもらって。
円　全然知らなかった。相談くらいしてくれてもよかったのに。
優人　そうやね。言い出せんかったんかな。
円　どうだろう。そういうとこあったし。
優人　そうなんだ。
円　普段口数は少なくて大事なことは何も言わんくせに、私には色々言ってくる。私も不器用やからさ、色々上手くできんくて。よく「もう少し考えてやれよ」「こっちの方が合理的だって分かんないの？」って。
優人　え。
円　返信遅くなったら、「なんでメッセージ見ないの？」って。そのくせ自分の機嫌が悪くなったら私のこと無視するし。
優人　それって……。
円　モラハラだよね。最初は優しかったのに、慣れてくると少しずつ変に

優人　なっちゃって。私はいつも、彼の中の正解を探しとる。
円　うん。
　　彼に結婚しようって言われた時にね、この人とずっといること考えた時に「このままでいいのかな」って思って。だから一月距離を置いた。それで鹿児島帰ってたの。
優人　そっか。
円　支配したかったんよ、多分。思い通りにしたかった。彼にはそういう欲望が強かった。私が演劇やるのにいい顔しなかったんも、多分、そのせい。1月距離を置いたら、思い直して、変わってくれるかもって思ったんやけど。まあある意味、大がわりしたけど。
優人　確かに。
円　（木を眺めて）……何も言わないなら、今の方が都合いい。

円は、植物を見つめている。

10

場面が変わって、同じ頃。そこは美月と桜の住む家。
美月は自分の右手をじっと見つめて何かを考えている。
そこに桜が現れる。

桜　また思い出してるんでしょ。
美月　はい。
桜　言ってるでしょ、感情的になっちゃダメだって。
美月　大丈夫です。
桜　嘘ついてる。
美月　ごめんなさい。
桜　どうしたの。私心配なんだけど。
美月　お姉ちゃん……。ごめんなさい。
桜　言ったよね？一緒に支え合って生きていこうって。それなのに、変な男につかまって。
美月　変なって。
桜　変でしょ。こんな年下の女の子を。
美月　それは私から……。

桜　やめて、聞きたく無い。……分かった。またデトックスしましょう。
美月　……。お願いします。

と、桜は蓋付きの小さな壺を持ってくる。
カパッと開いて、

桜　あなたが抱えている、悪い感情を全部言葉にしちゃいなさい。全部自分の外側に置いて、内側を空っぽにするの。それであなたの心を乱す悪い感情を全部こそげとる。
美月　はい。
桜　いくよ。……。はい！（と壺の蓋を開ける）
美月　（大きな声で早口に）私は、直さんに、お姉ちゃんにダメと言われている、マクドナルドに連れて行ってもらいました！
桜　はい！（受け止める）
美月　（以下、同じく）店は煌々と輝いていて、少し目が痛くなって、でも直さんに「好きなの頼みな」って言われて、エッグチーズバーガーのセットを注文しました！
桜　はい！
美月　サイドメニューはチキンナゲットで、飲み物はファンタグレープにしました！
桜　はい！
美月　あとソースはバーベキューソースにしました！
桜　はい！
美月　味は、お姉ちゃんの言う通り、とっても濃くって、ケチャップがいつも使ってる3倍くらい入っていて、とっても……、とっても刺激的でした！
桜　はい！
美月　ナゲットも、ファンタグレープも、刺激的でした！
桜　はい！
美月　でも、バーベキューソースの味が、妙に忘れられなくて、ナゲットがなくなったあとも、何度も、何度も人差し指につけて全部舐め切っちゃいました！
桜　はい！
美月　直さんは、それを見て少し不思議がりながら笑ってくれて、追加で4

桜　０円払ってマスタードソースも買ってくれました！
美月　はい！
桜　マスタードソースは少し辛かったです！
美月　はい！
桜　でも全部舐め切りました！
美月　はい！
桜　だから私はお腹が空くと、そのマクドナルドの味を思い出してしまって、そして直さんのことも思い出してしまいました！
美月　はい！
桜　この人は私が知らないことをいっぱい知っていて、すごいなって憧れてしまいました！
美月　はい！
桜　私は、彼女の人はもっと色んなことを教えてもらっているのかなと思うと、羨ましくなりました！
美月　はい！
桜　家の場所も教えてもらって、家の前まで何度か行ってしまいました！
美月　はい！
桜　私は、彼のことがもっと知りたくなってしまいました！
美月　はい！
桜　お腹が空きました！
美月　はい！
桜　お腹が空きました！
美月　はい！
桜　お腹が空きました！
美月　はい！
桜　すみませんでしたーー！
美月　はい！！（と閉じ込めるように蓋を閉める）

肩で息を切らしている美月。
桜は呪いをかけるようにその壺を揺らす。

桜　すっきりした？
美月　……うん。ありがとう。

桜　良かった。私はこれを庭に埋めてくるね。オリヅルランが浄化させてくれるから。
美月　はい。
桜　早く、元の美月ちゃんに戻ってね。
美月　……私、もう大人だよ。
桜　大人だから、もう間違えないでしょ？
美月　……。
桜　お願いだから。
美月　すみません。
桜　……分かった。やっぱり私たちには戒めが必要なのね。
美月　え。
桜　ふとした時にそれを見て、自らを顧みるような。警告してくれるような。何か考えておくね。あなたのためだから。
美月　……はい。
桜　（優しく）先にご飯食べてて。私は今日、またオンラインセミナーをしなきゃいけなくて。私たちの考えを、一人でも多くの人にわかってもらわなきゃ。一緒に食べられなくてごめんね。
美月　ううん。頑張って。
桜　ありがとう。

と、桜は壺を持って部屋を出ていく。

美月はまた自分の右手を、右の手の人差し指をみつめて、そっと舐めてみるが、バーベキューソースの味はしない。

美月も去る。

11

そこは優人の部屋。

机と椅子。机の上にはパソコン、キーボード。灰皿にタバコの吸い殻。

優人がいる。頭の植物はとても大きく育っていて、体からも少し枝が出ている。そして足はプランターに入れた土に突っ込んでいる。もう右手はほぼ完全に樹木化していて、差し出した状態で固定されている。

と、玄関のチャイムがなって、

優人　はーい。どうぞー、空いてまーす。
円　（声だけ）いるー？
優人　いるよー。
円　（部屋に入ってくる）お邪魔しまーす……。え。
優人　ごめんねー、わざわざ呼び出しちゃって。ちょっと、俺が動けんでから。
円　何してるの。
優人　さっきまで脚本書いとって。今度の芝居の。
円　いや、そうじゃなくてよ。
優人　え。
円　頭。体も。
優人　あ、これ？
円　刈ったんやなかったん。頭。
優人　大丈夫大丈夫、さっきまた除草剤飲んだから。
円　飲んだん？
優人　塗るだけやったら効きが悪くて。
円　病院は？
優人　行かんよそんなん。行ったら人体実験よ。
円　大丈夫やないって、絶対。
優人　（大きい声で）大丈夫ってぇ！！

と優人の端末に心が乱れたことを知らせる通知がくる。

円　……大きい声出さんでよ。
優人　……ごめん。
円　……こっちこそごめん。
優人　最近、ちょっともうイライラしてから。虫はよってくるし喉乾くし、なんか変なこと考えるし。
円　なんか、できることある？
優人　できること？それは……。
円　ほら、たとえば枝の剪定とか。殺虫剤買ってくるとか。
優人　ああ、そういうことね。えーっとね。殺虫剤はアマゾンでもうすぐ届くけ、大丈夫。
円　そっか。

優人　便利やね。プライム。
円　ああ。……その状態で書いてるんだ、脚本。
優人　ああ、うん。（左手で不器用にキーボードを叩き）こうやって。少しずつ。
円　……公演、できるん。
優人　……どうやろ。遺作になるかも。
円　縁起でもない。
優人　俺が木になった後、劇団員のみんな俺がいなくても上演してくれるかな……。無理やろうな……。
円　……大丈夫よ。
優人　……気休めでも嬉しい。
円　ってか、（全身を眺めて）木になると決まったわけやないし……（諦め）。
優人　……（諦めつつ）ありがと。
円　部屋、片付けようか。動けんやろ。
優人　あ、いや、（プランターごとジャンプして）こうやって移動できるんよ。
円　ああ……。それはなんでそんなことなったん。
優人　安心する。土に突っ込んでると。
円　ええ……。
優人　なんか、脳みそにまで根っこが伸びとるんかな。すごく湿った土に足を突っ込んでるとね、幸せホルモンが出てる気がするんよ。それで突っ込んでたら、根が張って抜けんくなった。
円　あ、抜けないんだ。
優人　うん。（足を抜こうとするが）無理だね。もう立派な根っこが張っとる感覚がある。
円　……。
優人　でも、片付け、手伝ってくれると嬉しいかも。しゃがむのきついけん。
円　うん、全然。全然大丈夫。ほら、こんなたくさんタバコの吸い殻。
優人　脚本書く時吸っちゃうんよね、どうしても。あと、煙で虫除けにもなるし。
円　こんなに散らかっとったら、燃え移っても知らんよ。
優人　（自分の木を指して）燃料はたっぷりあるからね。
円　洒落にならんから。気をつけて。本当に。

優人　（グッと来て）ごめん。ありがとう。

と、円は優人の部屋の片付けを始める。

優人　円ちゃん来てくれて助かった。ありがと。

円　どうしたん、改めて。

優人　いや、しみじみ。人間の部分が活性化する気がする。

と、端末に通知が来る。

優人　やっぱり人間同士じゃないと、人間の気持ちなんか分からんからさ。分かり合えるって、幸せだわ。

円　そうだね。良かった。

優人　ごめん、喉乾いちゃった。そこの水取って。

円　あ、はいはい。

と、優人は何かを我慢するように水をごくごくと飲む。

しかし、優人の渇きは満たされない。

優人　もう直さんに未練？みたいなのはないわけ。

円　え。何急に。

優人　モラハラだったり、浮気だったりしてたわけやろ。木、どうするん。

円　あー、うん、そうやね。あ、でもやけんって、あの女に木は渡さん。

優人　それはそうやね。

円　普通に気に食わんし。燃やして、火葬にでもしてやろっかな。あ、でも、緒ヶ玉くんに研究対象として全部あげちゃうのでもいいな。

優人　確かに。それがいいかも。

円　それで研究が進んだら、優人くんが元に戻るワクチン的なものが？発明されるかもしれんし。

優人　ありがてー。

円　治りますように。

優人　……治ったらさ、やっぱりまた劇団出てよ。

円　うーん？またそれ？

優人　劇団出るだけじゃなくてさ、（意を決して）俺と一緒に居てよ。

端末に通知が来る。優人は急いでマナーモードにする。

円　……それって。どういうこと？
優人　……友達としてね。もちろん。
円　ああ、友達としてね。びっくりしたー、急に。
優人　当たり前やろー。やめてよー。
円　よねー。

二人は笑い合う。

円　トイレ借りていい？電車降りてから我慢しとったの思い出した。
優人　え？オシッコ？

優人の端末にまたバイブ音のような通知が来る。

円　……そうだけど。どこ？こっち？
優人　（意を決して）相談があるんだけど。
円　え、トイレから帰ってからじゃだめ。
優人　うん。ちょっと、今、相談。
円　じゃあ、手短に。
優人　……こういう話知っとる？砂漠で。
円　砂漠？
優人　うん。砂漠。砂漠でサバイバルとかするときに、水ってすっごい貴重なんよ。
円　まあ、そうだろうね。
優人　うん。砂漠ではなんでも役に立てなきゃ生きていけない。蛇でもサボテンでも、蠍でも。
円　うん。
優人　で、それは排泄物も同じで。
円　うん。え。
優人　あれって、どうやっても、体から出ていっちゃうものらしいんよ。でも無駄にするわけにはいけん。やけんね、これは俺が見たユーチューブチャンネルではって話なんやけど、砂漠で捕まえたネズミを、人間のオシッコで煮込んでスープにするの。

通知。

円　マジ。
優人　うん。ディスカバリーチャンネルでやっとった。
円　うげー、気持ち悪い。
優人　でも砂漠で死ぬよりかマシやない？
円　うーん。どうやろ。
優人　もう一個、こんな話があってさ。
円　まだ？
優人　オシッコにはさ、

通知。

優人　リンとか窒素とかそういう物質が含まれていて、ほら江戸時代には糞尿を使って肥料にしてたって話知っとる？つまり、植物にオシッコって栄養とも言えるわけなんよ。

通知。

円　……うん。
優人　それでさ、飲ませてくれない？
円　……え。
優人　円ちゃんのオシッコ。

通知。

優人　あ、違う！これは、君丸にも確認取ったから確かな情報なんやけど、この植物はそういうものを栄養に生きてるわけで！

通知。

円　はあ？
優人　勘違いしてほしくないのは、江野木優人が円ちゃんの尿を欲しているわけではなくて、俺に生えている植物が円ちゃんの尿を欲してい

るだけで、

通知。

円　キモいキモいキモいキモい。

優人　もちろん、無理やり飲むなんてことはないし、円ちゃんの合意が無かったら失礼だということも分かっとる！ちゃんと合意も取るし、なんなら合意書類も作ってるからあとは合意するだけやし。

通知。

優人は煩わしくなったのか、端末の電源を切る。

円　いや、自分の飲みなよ。自分の。

優人　出らんのよ、全く。

円　え？

優人　こんな体になっちゃってから、排泄されるはずの水分は全部こっち（植物）に持ってかれちゃって。そういう体になっとるんよ。

円　そうなの。

優人　体が求めとるんやろうね、強く。トイレから臭ってくる匂いとかでもうすっごく「オシッコ飲みたい！！」って叫んどるんよ。頭のこの辺で。人間を見るたびに「オシッコ製造機だ！」って思っちゃうくらいには、そのこと考え出すとオシッコのことしか考えられんくて。

円　なんそれ。

優人　中高生の頃さ、もう性に対しての興味がビンビンで、一年年上の先輩が使っとる日焼け止めの匂い嗅ぐだけでちょっと勃起しちゃうような、女の人を見る度におっぱいとかそういうことしか考えられんくなるみたいな感じで、人を見るとオシッコのことしか考えられんくてから。

円　よく恥ずかしげもなくそんなこと言えるね。ちょっとごめん、マジで無理だから。それは。やっぱり生理的に。ちょっとそろそろトイレ限界だから、行くね、ごめん。

と、円はトイレに向かって行こうとする。

しかし、優人はその道を遮るように、プランターごと移動する。

円　（漏れそう）何。
優人　こっちも限界なんよ。お願い！もう脚本の執筆も手につかん。オシッコの代わりにオシッコに含まれる成分調べて、実質オシッコみたいな錠剤取り寄せて試してみたけど、オーガニックなオシッコには全然勝てんで。
円　オシッコオシッコ連呼するな。
優人　お願い！お願いします！
円　いやー、無理だわ。ごめん、無理だわ。
優人　（頭を上げない）
円　いや、頭あげてって。無理だから。本当に。
優人　……そっか。無理か、無理よね。
円　うん。ごめん。ごめんっていうか。ごめん。もう行っていい？行くよ。
優人　じゃあ、匂いだけは。
円　は？
優人　円ちゃんは普通にトイレでオシッコする。で、流さずに出てくる。俺はその匂いで錠剤飲む。いつも通り。流さないだけ。
円　……それで満足するの。
優人　分からん。いや、する。するけん。それならいい？
円　いや、無理無理。なんか妥協してオッケーする雰囲気なりそうだったけど、拒否で。
優人　ダメかー。
円　もう、動物とか、犬のオシッコとかは。ほら、いいやん。誰も傷つかん。
優人　それは人としてどうなの。俺は人として人の尊厳のもと、人のオシッコを飲みたいって話をしてるので！
円　オシッコならなんでもいいんじゃないの。
優人　オシッコならなんでもいいんじゃないの！
円　ちょっと、もういいや、コンビニのトイレ借りるけん。マンション出たとこあったよね。（部屋を出て行こうとする）
優人　（呼び止めて）……好き。
円　は？
優人　円ちゃんが好きなんよ？円ちゃんのオシッコが飲みたいんよ。
円　最低。
優人　（プランターを引きずりながら）お願い！お願い！

と、プランターが部屋のカーペットに引っかかり、体ごと倒れてしまう。

優人　（もがいて）あー！あー。

優人は立ち上がれない。

優人　助けてー。

円は哀れな、蔑むような目でその姿を見ている。

と、また玄関のチャイムが鳴る。

12

君丸が現れる。

君丸　お邪魔します。

優人　君丸？ちょっと起こしてくんない。

君丸　はい。柊さん、そっち持ってもらえますか。

円は動かず、手伝わない。

円　なんでそんなに、頭の中、欲望に支配されるん。

優人　この草がさ。

円　ちょっとごめん。もう何も信じられんかも。

円は去る。

君丸　あれ。なんかあったんすか。

優人　いやいや、大丈夫。なんもないから。それより早く起こしてくんない。

君丸　ああ、はい。

と、君丸の介助で優人は立ち上がる。

優人　ありがと。

君丸　何してたんですか。
優人　なんでもないよ。
君丸　僕もいやですから。オシッコは。
優人　聞いてたんかい。
君丸　外の廊下まで響いてましたから。
優人　……こんでいいって。お前。
君丸　定期的に、データ集めたいんですよ。サンプルが少ないんで。

と、君丸は優人の体や植物を観察する。

優人　最低だよな。俺は。
君丸　はあ。
優人　結局根っこの部分はこんなもんよ。人間はここまで弱い。合意を得られればいいとか、そんな単純な話やない。……好きで男やっとるわけやないのに。情けない。
君丸　（鼻で笑う）ああ。
優人　なんなん。バカにしとるん。
君丸　大変そうですね。
優人　人ごと。
君丸　これは仮説ですけど。もしかしたら、この植物はそういう欲望に根を張るのかもしれません。
優人　欲望？
君丸　……誰かを虐げたい、支配したい。そういう土壌を選んで発芽する。柊さんのパートナーもそういう気質があったらしいじゃないですか。聞きました。
優人　そっか。
君丸　つけ込まれたんですかね。もしかしたら。一度根を張ってしまえば、簡単には抜けない。
優人　……もうなんでもいいや。バカにしろよ勝手に。いつもみたいに、すみませんとか、謝んなよ。
君丸　はい。今の先輩の姿見て、全然怖いとか思いませんし。
優人　は。
君丸　立場、逆転しましたね。昔と。
優人　……悪い。

君丸　辛いですよね。分かりますよ。
優人　……。なんなん。お前らしくない。
君丸　僕は合意も得られないんで。
優人　あ、そっか。お前そっちって言っとったね。それは確かに大変そう。
君丸　そっち？
優人　だから、好きになるのが男なんやろ、女の人に興味ないって。
君丸　別に僕、男の人にも興味ないですよ。
優人　え？
君丸　人間に興味ないです。
優人　何それ。
君丸　ヤドリギの木の実って、こうやって潰すとベターってしてて、伸ばすと糸を引くんです。こうやって。で、小学5年生のころ、僕はそれを見て初めて射精しました。それ以来……僕、植物に興奮するようになったんです。
優人　は。
君丸　でも、植物って喋らないから。それがいいところでもあるんですけど、合意取れないんですよね。合意なくそういうことをするのは、植物に対してとっても失礼だなって思って。でもだからこそ、いつか植物と合意できたら。合意の上でそういうことできたらって思っていました。
優人　……やめろよ。やめろよ。

君丸は優人の右手辺りの木の枝を、触れずに、でも愛撫するように眺める。
君丸は自分の右手に目をやり、そして優人の右手に埋められているチップに重ねるか
……となるその瞬間、

君丸　まあ、植物だったらなんでもいいってわけじゃないんで。安心してください。

13

それからしばらくしたある日の夜。そこは円の部屋。
円が部屋にいる。
玄関のチャイムが鳴る。円はインターホンで来訪者を確認して、無視する。

ドアを激しく叩く音と共に、美月の声がする。

美月　（以下、声だけ）すみません！すみません！

やはり無視をする円。

美月　すみません！あけてください！お願いします！

聞こえないふりをする。

美月　円さん！いませんか？すみません！

円は痺れを切らして玄関に出ていく。

舞台には植物だけが残る。

円　（以下声だけ）何。

美月　（以下、やはり声だけ）すみません。本当に。

円　迷惑なんだけど。

美月　すみません。本当にすみません。

円　何。

美月　いや、その。

円　用がないなら帰って。

美月　いや、それが……。知りたくて。

円　何を。

美月　あ、違う。そうじゃなくて、謝りたくて。

円　……何それ。

美月　許してもらわなくて大丈夫です。でも、なんか、謝らなきゃって。で、私が知ってること話さなきゃって思って。

円　……入って。

美月　え。

円　近所迷惑だから。入って。

部屋に円と美月が現れる。

美月の手には小さな壺が握られている。

美月　お邪魔します。
円　……。そこ。座って。
美月　すみません。失礼します。あ、手洗ってきていいですか。
円　は？
美月　あ、すみません、姉がいつもそう言ってて、癖みたいなもんで洗わなかったら気持ち悪いんです。でも、大丈夫です。我慢します。
円　……。そこ出て右。
美月　え。
円　洗面所。いいから。洗ってきな。
美月　すみません。

と、美月は壺を机の上に置いて席を立つ。
円はその壺に興味を持ち、パカっと、蓋を開ける。
美月が帰ってくる。

美月　（壺を見て）あ、開けちゃったんですね。
円　え。ああ、ごめん。（蓋を戻そうとする）
美月　あ。あ、そのままで。できれば、そのままで。
円　……？

美月は円から蓋を受け取り、机の上に置く。
小さな壺の蓋は開いたまま。

美月　（木を指して）これですか。
円　……そうだけど。
美月　（木に対して一礼。そして、円に話しかける）あの。すみません。
円　……なんなの、一体。
美月　私の姉が、かなり思想の強い人で。この前会ってもらったので分かると思うんですけど。
円　うん。
美月　あ、でもいいところもあるんですよ、両親が死んで私を大事に育ててくれて。
円　それで？
美月　だから、マイクロチップ？とか、入れるの断固反対だったんですね。

円　絶対許さないって。
美月　……だろうね。想像つく。
　　そうなんです。でも、私、直さんと出会ってから、いろんなこと教えてもらって。知らないことといっぱいあったんだって思うようになって。そしたら、もっと直さんのこと知りたいって思うようになって。
円　……。
美月　だから、初めて姉に反抗してみたんです。
円　どうしたの。
美月　入れたんです。私も。マイクロチップ。姉に内緒で。まあだからって、全部姉に管理されて生活してるから、何が便利になったわけでも、直さんのこと何か分かったってわけでもないんですけど。
円　……。
美月　そしたら、さっき、通知が来て。

美月は円に端末を見せる。

美月　教えてくれたんです。血流？とか心拍数とか、呼吸とか？そんなのから、バレちゃうんですよね。直さんに教わった通り。そしたらね、通知が来たんです。「悲しい気持ちのようです。深呼吸をしてみましょう」って。
円　……。
美月　私、あ、自分は今悲しいんだって、初めて気づきました。悲しい気持ちで一杯なんだって。気づいたら、そしたら、涙がどんどん、どんどん溢れてきて。
円　……。
美月　そしたら会いたいって思っちゃって。直さんに。どうしても会いたいって思って。でも無理だなって思って。
円　それで。のこのこやってきたんだ。
美月　……すみません。姉が家を留守にしている今のうちにって。
円　落ち着いたら帰って。
美月　でも、私知りたいんです。直さんの、私の知ってることも全部話します。
円　別にいいよ、もう。
美月　よくないです。

美月は壺を握りしめて、円を見る。

円　気持ち悪いんよ。もう。
美月　すみません。
円　その壺も。なんなん。こっち見らんでよ。
美月　ああ（手を離して）これは、私の気持ちです。
円　何それ。わけわかんない。
美月　姉が、自分の気持ちを全部言葉にしてこの壺に閉じ込めちゃうんです。自分の感情を自分の外側に置いて、感情に支配されないように。それで、この壺はうちの庭に埋められちゃうんですけど、どんなに詰めてもどんどん内側から湧いてきて。
円　あ、そう。
美月　だから、私の大事な感情を掘り返して持って来ました。そしたら開いちゃいました……。

間。

円　でも、最初のうちはいい顔してたんだろうけど。いいことないよ。あいつの、直のこと知っても。あんなモラハラ男。
美月　モラ……？
円　暴力男ってこと。殴られたりはしてないけど。言葉の暴力だよ。
美月　暴力。
円　そう。悪いやつなの。
美月　あ……。
円　がっかりでしょ。
美月　でも、直さん……。そうじゃないと思います。
円　そうなんだって。色々高圧的に。私が1ヶ月家を開けてたのもそれが原因なの。
美月　そうじゃなくて。カウンセリングに通ってました。
円　は。
美月　私も、大学に入ってから姉がちょっとおかしいんだって気づいて、カウンセリングに通い始めたんですけど、そこで直さんに会ったんです。そこで私から話しかけて。
円　何それ。全然知らないんだけど。

美月　言ってました。パートナーに横柄に当たっちゃうのを変えたくて、変わりたくて通ってるって。

円　嘘だ。

美月　嘘じゃないです。本当に言ってました。病院の名前も先生の名前も言えます。

円　……。だとしても。そこで出会った若い子に誘われて不貞を働いちゃうような男、どっちにしろ無理でしょ。

美月　不貞？

円　……えっちなこと。

美月　してませんよ。何も。

円　は。だって、合意関係にあったって言ってたじゃん。

美月　あ、あれは……。すみません。

円　何。あれも嘘ってこと？何も信じられないんだけど。

美月　あれは、そうじゃありません。マクドナルドです。

円　え。

美月　マクドナルドに一緒に行くための、合意です。ほら。

美月は円に端末を見せる。

14

場面が変わる。前のシーンと同じ日。同じ頃。

そこは優人の家。

ほとんど植物に飲み込まれてしまい、顔だけがこちらをみている。

そして部屋には桜がいる。優人はうとうととしながら、桜の話を聞いている。

桜　ですからね、私思うんです。人間はこのままだとお互いに傷つけあって殺し合って、絶滅するしかないんじゃないかって。だから私活動しているんです。私と妹、そして世界が滅びないように。そのためには、大地に根を伸ばす木々のように慎ましく、自分のわがままな感情というものから解放されて――（優人に）聞いてますか？

優人　（目を覚まして）ああ、すみません、聞いてます、起きてます。

桜　良かった。

優人　最近すごいボーッとしてて。僕が僕じゃなくなっていくみたいな。

桜　いいんですよ、それで。優人さんは今、システムそのものになろうとしている。
優人　システム？
桜　はい。水を飲み光を受け、粛々と代謝を繰り返す。私が理想として掲げる人間の姿そのものです。もはや神です。
優人　神……。最初正直何言ってるか全然分からなかったんですけど、こんな体になって、オンラインセミナーとかに参加してみたら、一理あるなって。
桜　優人さんなら、気づいてもらえるって分かっていました。私分かるんです。その人の顔を見ると。
優人　マッチングという、不純な出会いでしたけど。
桜　いいんです。
優人　いいんですか。
桜　いいんです。動機やきっかけはなんでも。
優人　はい。
桜　人はきっと、本来収まるべき鉢植えが決まっているんです。でも感情や欲望に振り回されて、それを見失ってしまう。でもね、優人さん。あなたの幸せの鉢植えはここにあるんです。だから結果的に、あなたの行動は大正解なのです。
優人　良かった……。みんなそれぞれがいろんな気持ち抱えてて、合意をとるとかって言いながら、気を遣って、取ればとるほど本心とはかけ離れていっちゃう気がして。だからもう、正解とか分からなくって。時代遅れになっちゃうって怖くて……。
桜　正しいですよ。あなたは、迷って迷って、自分の鉢植えを見つけたんですから。正解です。正解ですよ。
優人　ありがとうございます。本物はやっぱり説得力が違います。
桜　いいんです。いいんですよ。

と、桜は自分の荷物から、植木バサミを取り出して、優人の枝に手をかける。

優人　（目を覚まして）あ、すみません、（桜の様子に気付き）あれ？
桜　ああ……。実は、優人さんには象徴になってもらおうと思っていて。
優人　え。
桜　象徴、シンボルです。戒めの。

優人　え？
桜　何も。何もせず、ただこうやって日々生きていればいいんです。代謝を繰り返しながら。
優人　はあ……。
桜　大丈夫ですよ、悪いことには使いません。セミナーを開いた時にお土産に渡したり、木の実をノベルティにしたり。あ、葉っぱを栞として使ってもらうのもいいですね。身近なところに置いて、自らを戒めるような、象徴に。
優人　ああ……。
桜　大丈夫ですよ、優人さん。そこがあなたの幸せの鉢植えですから。それで正解なのです。（と植物の肌をさする）
優人　あ、ああ……（うとうととする）

と、玄関のチャイムが鳴る。
君丸が現れる。

君丸　お邪魔します。
桜　……お邪魔してます。
君丸　何してるんですか。
桜　いえ、象徴になってもらおうと思って。
君丸　象徴？
桜　そうだ、ちょうど良い。あなたも今度一度セミナーに参加してみてください。あなた、お名前は？

と、桜は君丸にリーフレットを渡す。
君丸は桜の問いかけには答えず、リーフレットを読む。

君丸　先輩は？
桜　優人さん？優人さんはすべて理解してくれましたよ。
君丸　（リーフレットを読んで）植物は別に慎ましくないですよ。
桜　え？
君丸　無反応でもない。間違っています。これ。
桜　だって、こうして黙って立っているでしょ。

桜は優人の頬を軽く叩くと、優人は一度目を覚まして、

優人　ああ、聞いてます聞いて……（うとうとする）

そして、眠る。

桜　優人さんは、まだ人間の部分が残っていますけど。

君丸　傲慢ですよ。

桜　はい？

君丸　植物は答えてくれます。愛情を注げば注いだ分、雑に扱えばその分そうやって育ちます。

桜　ええ。

君丸　植物は雄弁です。分からないんだとしたら、こちらの想像力の問題です。

その時、優人の端末から通知が鳴る。

君丸は優人の端末を確認する。

桜　……そうですね。そうかもしれません。でも、私たちが言っていることは、根っこの部分では同じことなのではないでしょうか。あなたは少し思い込みが強いだけで。

君丸　……話しても無駄みたいですね。

桜　そうですか？私はそうは思いませんが。

君丸　それができないなら……僕たちは共に生きるべきではないのかもしれません。

君丸は、優人の机に近づき、そこに置いてあるライターを手に取る。

15

同じ日。同じ頃。再び円の部屋。

13場の終わりから、少し時間が経っている。

美月　ききますねー！（と壺に）鼻に抜けてクラっとする感じ。

円　直が一番好きな焼酎。クイって、飲んじゃって、でもあいつ全然酔わなくてさ。
美月　へー。（壺に）全然酔わない。
円　うち、地元が鹿児島でさ、鹿児島ってみんなお酒強いのね。
美月　（壺に）鹿児島はお酒が強い。
円　もちろん、強くない人もいるけど。
美月　（壺に）強くない人もいる。
円　で、鹿児島に直が遊びに来てくれたことあって、家族とお酒飲んでさ。でも、全然。全然負けてないのよね。それでうちの両親も気に入っちゃってさ。
美月　へー。（壺に）負けてない。気に入られた。
円　懐かしいな……。
美月　（少し迷って、そして壺に）懐かしい。
円　それはいいから。
美月　あ、はい。
円　それ（壺）、意味なくない？
美月　意味、ないですかね。ないかもしれません。
円　お姉ちゃんのあれやろ。意味ないって。
美月　あー……。でも、ここに収めないと気持ち悪いっていうか。根づいちゃってるっていうか。
円　ああ。
美月　収めたことが、私の本当の気持ちだって思うのかもしれません。気持ち悪いっすね！なんか。やめます！（壺を置く）
円　別に。すぐやめんでもいいかもね。ゆっくり。
美月　（我慢できなくなって壺を持って、壺に収める）そうですよねー、それに、なんかこの方が簡単に忘れない気がするし。後で取り出せる気がするし。
円　そうかもね。
美月　（壺に）好きだー！！
円　それは、やめろ。
美月　はい。それは、独占欲？
円　……そうかもしれない。
美月　（壺に）独占欲。
円　どうしても、自分のものは自分だけのものでいて欲しいって思っち

美月　ゃう。
円　分かりますよ。
美月　分かってくれる？
最初に話しかけた時、道端で。木を私のものにしたいって、思ったら、あんなことしちゃって……。すみませんでした。
円　いいよ、大丈夫。もう。
美月　あ、でも本当に大丈夫ですよ。マクドナルドでお互いのこと相談してたんです。私は姉のことを。直さんは木のことと、円さんのことを。
円　……うん。
美月　私はマクドナルドじゃないところにも連れて行ってって食い下がったんですけど、直さん我慢してました。プロポーズした彼女いるからって。
円　我慢してって。
美月　かなり揺らいでましたけど。
円　えー。本当に行ってないんだろうなー。
美月　（不服そうに）本当ですよー。こんな若い子とご飯いくのも、とか言って、わざわざ合意取らされて。

二人は笑う。

円　まだ飲む？
美月　あー。
円　まあ、無理せず（自分に注ぐ）。
美月　いや、いただきます。
円　大丈夫？
美月　はい。覚えてたいんで。
円　そっか。飲みすぎると忘れちゃうから気をつけてね。
美月　そうなんですか。
円　うん。
美月　不思議だ……。

円は端末を取り出して音楽を再生する。

美月　なんですか？

円　これ。直が好きだった曲。
美月　そうなんですね。
円　よく鼻歌で歌ってた。

そこにいるものたちは、音楽に耳を澄ませている。

円　（何かが込み上げてきて）良かったー。
美月　え。
円　携帯見なくて。すげー見たかったけど。直の携帯。
美月　えー、見ちゃえば良かったのに。
円　見てたら罪悪感しか残らなかったと思うから。
美月　そういうもんですかね。
円　分かんないけど。（木を眺めて）変わろうとしてくれてたんだ。

間。二人はそこに立っている植物を眺めている。

美月　じゃあ、そろそろ帰らなきゃ。
円　帰るの。
美月　はい、姉が心配すると思うんで。
円　（音楽の再生を停止して）……帰らなくていいんじゃない。
美月　もう、色々教えてもらいましたから。
円　それもだけど、それだけじゃなくて。
美月　え。
円　逃げられるなら、逃げた方がいいよ。
美月　……姉ですから。あれでも、血のつながった姉なんです。
円　血とか関係ないよ。あなたの幸せのために行動して欲しい。あなたの居場所は他にもあるから。
美月　……でも。これは、私に与えられた試練みたいな。乗り越えないと。
円　絶滅しちゃうよ。
美月　え？
円　遅くなる前に。私たちみたいに。お互い不幸せになる。
美月　姉なんです。あれでも。ご飯をつくってくれて、おはようって言ってくれるんです。私のこと気づいてくれるんです。
円　うん。

美月　どうしたらいいんでしょうね……。

円は美月を優しく抱きしめる。

二人は動けない。

円　どうしたら、いいんだろうね。本当はこのままじゃ良くないって思ってるのに。分かってるのに。愛してるもんね。愛しちゃってるもんね。どうしたらいいんだろうね。

二人は抱擁を続ける。

抱擁を解き、

美月　すみません。ありがとうございます。

円　ううん。ごめん。

美月　友達になりませんか。私たち。なれませんか。

円　なるよ、友達。もちろん。

美月　ありがとうございます。

その時、遠くから消防車のサイレンが聞こえてくる。

美月　あれ、火事ですかね。

円　本当だ。西の方。あれ。

美月　どうしたんですか。

円　あっち、優人くんちの方角だ。

美月　え。

円　こっちからの方が見やすいかも。

円と美月は手を繋いで、部屋を出ていく。

しばらくして、Ａ－スピーカーから音楽が流れてくる。

それは、木田直の好きな曲だ。

植物は呼吸を続けている中で、そこは暗闇に包まれる。

おわり